

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

コープ未来の^{あした}森づくり基金レポート

モリイク

M O R I - I K U

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol.20
Oct. 2020



「森づくり」という言葉に携わってからは10年、モリイクもおかげさまで20号を数えます。その間、実にさまざまな森づくりの形を見てきて、はて、森づくりとはなんだろう、と考えるようになりました。そうすると森づくりの前に森というのは自分にとってナニモノなのだろうか、という袋小路に突き当たったのです。森という言葉の意味は明瞭だけど、自分にとって辞書に載っている文章のような簡単な話ではないよなあ…。

吹雪の森を歩いていたらある時、このまま死んだらどうなるだろう、と(縁起でもなく)考えたことがあります。出てきた答えは、森という無限の命の連なりが布団のように包み込んで、自分の全てを受け入れてほかの命と差別することなくすっかり消してくれるだろう、ということでした。そんなことを想起したのは、轟々とした吹雪の下でも、あまりに穏やかに優しく自分を含む命を抱きとめている森という空間の不思議さも手伝ったのでしょうか。いずれにしても、これほど孤独な状況でありながら「自分は一人じゃないのだな」と理解した吹雪の森の出来事はとても大切な気づきとなったのです。

さて、翻って「森づくり」とは、もしかしたら人がそうした他者とのつながりを感じる機会を提供できる「場づくり」なのではないかと思に至ります。私たちが育てた森のつながりが100年後に誰かの傷ついた心や孤独な心を救うかもしれない、そう思うと、やっぱり森づくりって素敵な仕事に違いないのです。



<https://www.facebook.com/coop.asumori>

モリイク vol.20
2020年10月発行
発行元/ コープ未来の森づくり基金



この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクと、適切に管理されたFSC®認証材およびその他の管理された供給源からの原材料で作成されています。



森づくりと私

今、もういちど
森と私の間について
考えよう。



コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

- *02 写真随筆
淡いの森の奥へ
- *08 未来のための市民による森づくり
あしたのあすもり
- *10 木育essay
森を統べる神々の名前
- *11 もっと樹のことを語ろう
大きな木の小さな物語
- *12 親子で楽しむ森のページ
森のキモイ・キレイ
- *14 数字で見る あすもりの12年
- *16 植樹地を見に行こう
- *19 コープ未来の森づくり基金報告

写真随筆
淡いの森の奥へ
小寺 卓矢

内と外

ぼくが自分の生業を「森を撮る写真家です」と言し始めてから、かれこれ20年ほどになります。ただ、その肩書きから多くの方々が想像するほどには森に始終入り浸っているわけではありません。ぼくの森との関わり方はあくまでも、気が向いたときに森へ出かけて草木の間を徘徊

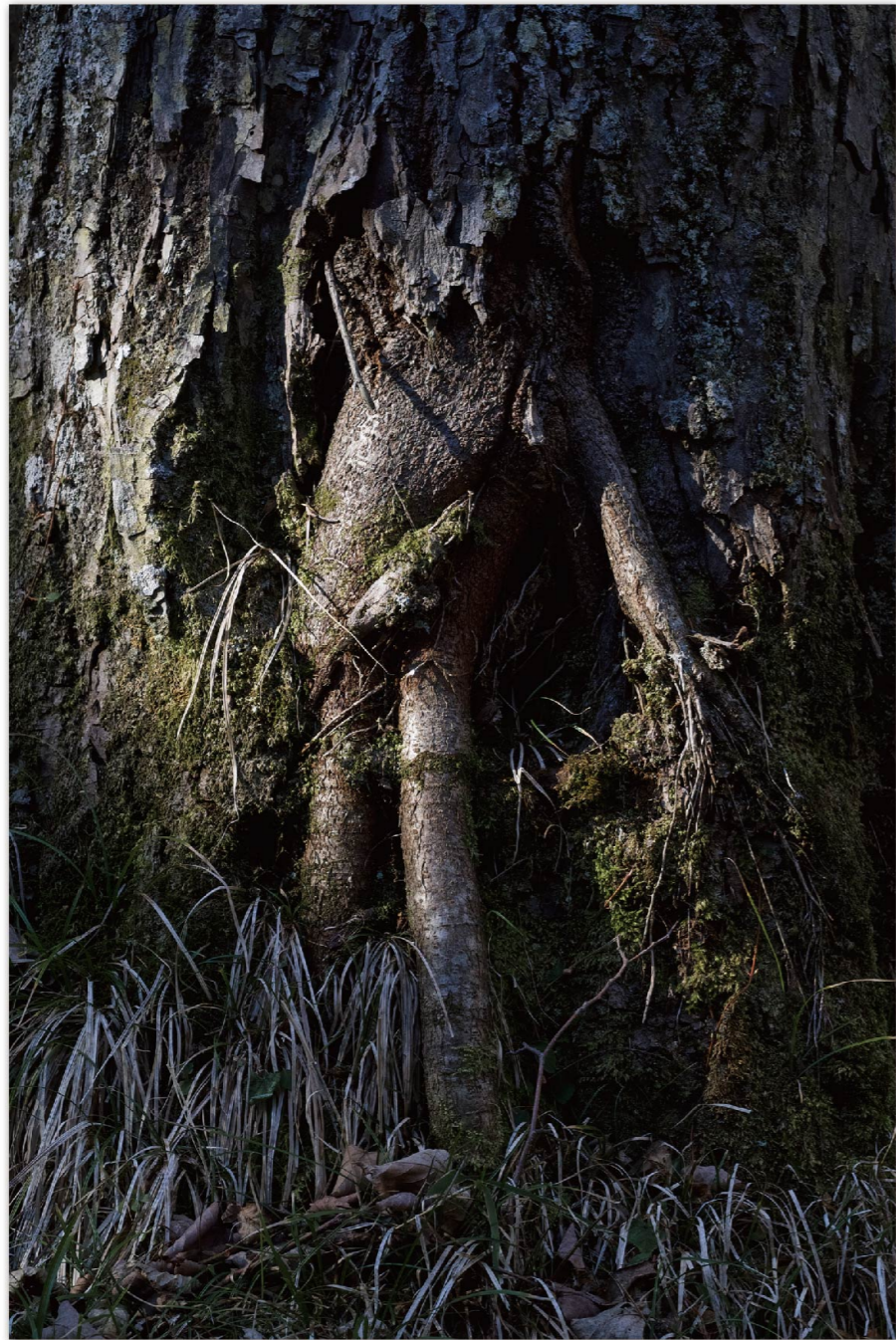
し、「ああ美しい」と感じられた森の〈いのちの様〉に気まぐれにレンズを向けるだけ。ごくごくいい加減なものです。

しかし、そのいい加減さを自覚するがゆえに、かえってぼくには不思議なことがあります。それは「なぜぼくはこうも飽きずに森に思いを寄せ続けるのだろう」ということです。

道東の小都市の戸建て住居

に住み、コープのトドックで日々の糧を得るようなぼくにとって、森は「生活の場」ではありません。他方、森は確かに「仕事の場」ではあるのですが、それは例えば林業家や猟師のように実用資源を収穫する場ではなく、研究者のように特定の課題究明に取り組む場でも、開拓者にとっての「何としても立ち向かうべき相手」でもありません。

要は、森に通うにあたっての実利的な必要や切実な動機がぼくには欠けています。森は明らかに自分の「外なるもの」、それも「かなり遠い外部」に過ぎません。にも関わらず、森はいつも「深くぼくの胸の内に在る」。この「外であり内である」というぼくにとっての森の両義性が、何だか不思議に感じられるのです。



森とは何か

「そもそも森って何だろう」と度々考えます。

「森」という漢字が三本の木かたどで象られ、またアイヌ語で森を「ニ・タイ」=「木・林」というように、木が多く生えていることがすなわち「森」なのでしょうか。

言わずもがな、森を作っているのは木だけではありません。草、

シダ、コケ、菌、動物たち、また水系や土壌・鉱物なども共に森を作ります。したがって、より厳密に定義するならば、森とは「樹木を主要素とした多様な生物群と有機/無機物からなる自然的な集合体」とでも言うのでしょうか。問いの「解答」としてはこれで間違っていないでしょう。

いや、もし森をさらに仔細に分析し、その構成要素のみなら

ず、例えば人間の身体生理に及ぼす有効作用や、また例えば遺伝子多様性保全機能などに科学的な価値付けを行えば、ぼく個人どころか全人類、もしくは地球にとっての「普遍的な森の存在意義」を定義することだって可能でしょう。

でも、でもなあ——。頭の中でいたずらに堅い言葉と理屈をこねくりまわしてみた後で、ぼ

くはかえって自分の胸の中に心地の悪さがむくりと盛り上がって来ることに気づきます。もやもやと割り切れない思いです。その心持ちをあえて言葉にすれば次のようになるでしょうか。

「そのように仔細に分け、解き、定め、正確に割り切ろうなどと考えるべきではないもの、それがぼくにとっての〈森〉なのではないか」。

若いハンノキ

道東のオンネトー湖畔の森で過ごしたある夏の日のことを思い出します。

その日は夕方まで歩き廻っても思わしい撮影成果が得られず、ぼくは湖畔にぼけっと立ち惚けていました。ふと、傍に立つ若いケヤマハンノキに目が留まりました。日没後の薄暮の中で不思議な存在感を放っています。ただ、それはいたってありふれた姿の木で、どこをどうフレーミングしても「有効な絵」になる予感がせず、撮影する気が起きません。

そのとき不意に、ぼくの頭におかしな考えが浮かびました。

「なぜぼくにはこのハンノキが撮れないのか。このハンノキだって紛れもない〈いのちの様〉ではないか。いのちであるということ

において、これまで写真に切り取ってきた幾多の草木たちとのハンノキと、一体どんな差があるというのか。ああそうなのだ、ぼくはこのたった一本のハンノキについてさえ、本当のところは何も分かっていないのだ」。

しかし、言うまでもなく、そんな大仰な自己憐憫の悲嘆をこぼしてみたところで、ハンノキが突如として美しく輝き出すなんてこ

とが起きるはずもありません。結局、写真は撮りませんでした。自分で弄した詮無い問いにも明解は与えられませんでした。

でもそのとき、暗さを増す森に融け込むように明瞭な輪郭線を失ってゆくハンノキは、なぜだか逆に、随分と親ちかい存在に感じられたのでした。



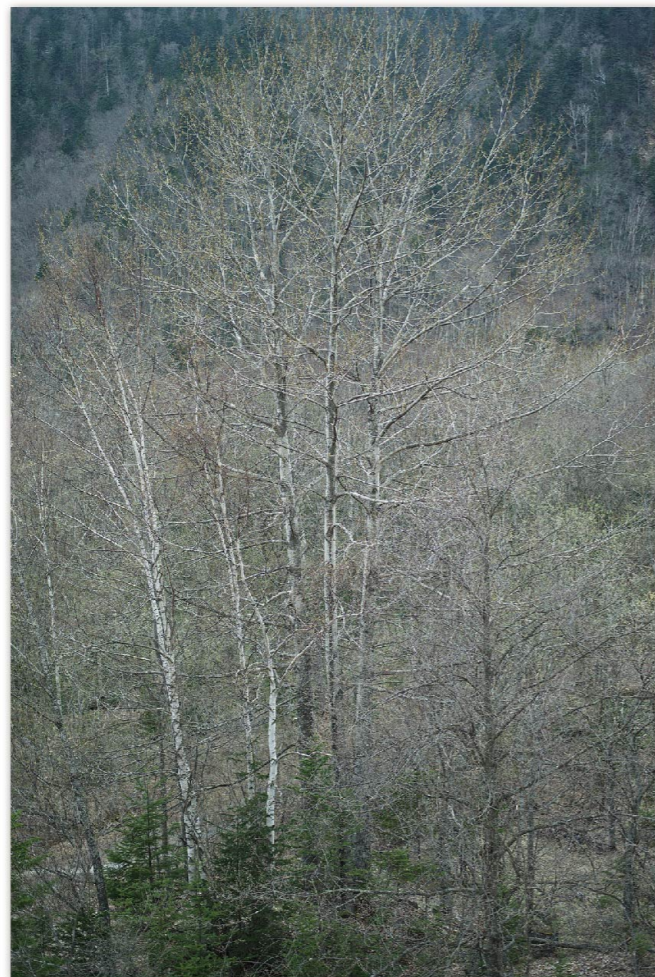
森が孕むもの

あらためて「森=もり」という言葉にじっと向き合くと、そこには柔らかな多義性、つまり「定まらなさ」が秘められていることに気づきます。

語源に詳しい辞書を引いてみると、「もり」の項には「森」とともに「社(社)・杜」という異字があり、神の依代^{よりしろ}や「山」との関連について言及があります。「盛り・茂り」「守る・護る」といった語も見えます。さらに類義語である「林=はやし」へと頁を繰れば、そこには「生やし」とあり、イメージは「生ゆ・榮ゆ・映ゆ」へと連ってゆきます。また「林」の字形の下に供儀の祭壇を象る「示」を添えた「禁=もる」という字が現れ、その響きからまた「もり=森」へと還れば、今度は「シン」の音で重なり合う「深・神」の字が見えて――。

〈もり〉という言葉がその内に孕み、またその外縁で結び合っているらしきものの、何と生めかしい「定まらなさ」でしょう。

ぼくはつい胸の中で思い巡らせてしまいます。森や林という漢字が大陸で発明されるよりも遙か昔、自然世界の一角を〈もり〉〈はやし〉と呼び始めた原初の人たちの眼や耳や胸の内には、どんなものが映えていたのだろう。彼らはそこで何を禁り、何を守っていたのだろう。そのとき、人にとって〈もり〉はいったい何ものだったのか。それは例えば、現在ぼくらがCO₂排出削減目標値を算定する際の一変数と見做す「森林・forest」と、果たして同じおもさをもつ〈もり〉だったのだろうか――。萌ゆる妄想が尽きません。



結びあう場所へ

昨今、森の外の人間社会では、様々な分断化が進んでいると言われます。

「正義と不義」「富と貧」「有益と無益」「強いと弱い」「疎と密」、そして「外と内」。

確かに、目に見えぬ「分け目・境い目」が各所で深まっているようです。

思えば今年、ウイルスという「生物/非生物の分別をつけ難い」存在が、国境という隔てを融かすように繁茂し、それがかえって人間に分離と疎外を選択させました。その際にウイルスが体現した「宿主細胞膜、すなわち境界面をすり抜けて〈他者の内部〉に潜入し、

他者が備えた機能や資源と自己を同一化することで〈自己増大〉を果たし、また〈外〉へ向かう」という挙動は、ぼくには何だか象徴的で示唆的なものを感じられました。もしかしたら、あの目に見えぬものたちは、そうした「外であり内である/他であり自である」というような振る舞いを通し、ぼくら人間に〈境について、想え〉と糺しているのかも――と考えたりします。

さて、ならば、素より境い目など無い森〈もり〉をわざわざ写真で分別するという「不遜の業」と、ぼくは今後どう向き合っていくでしょう。

じつのところ、撮れば撮るほど、森と自分がやっていることがよく分からなくなります。でも逆に、だからこそそれを愛しむことができているようにも思えます。いつか時が来れば、そうした矛盾や不遜が結んで睦みあい、ぼくの「内」に何か確かなものももりもりと産し生してくるでしょうかね。それを問いに、また森へ出かけましょう。✦



photo/text 小寺 卓矢

写真家、写真絵本作家。北海道内外の森林風景を撮影。雑誌や個展等で作品を発表するかわら、写真に平易な言葉を添えた「写真絵本」を刊行し、森の魅力を広い世代に伝えている。スライド上映会や写真絵本ワークショップ、音楽家とのコラボ公演等も多数。主な著作に『森のいのち』『だって春だもん』『いっしょだよ』『いろいろはっば』(いずれもアリス館)がある。来春、新作写真絵本を刊行予定。ウェブサイト <https://photokodera.com>



あすもりの あすもり



柿澤 宏昭 かきざわ ひろあき
北海道大学 森林政策学研究室 教授
コープ未来の森づくり基金 運営委員長

●あすもりの森づくりの 特徴についておしえてください

コープさっぽろの店舗でのレジ袋削減の話から始まって、熱心な組合員さんの活動が背景にあって、植樹をしたということだったんです。その中で、森づくりは植樹して育てて、使うまでが大事なのでそれが認識できる活動をしよう、という話がありました。

普通の企業が、いわゆる社会貢献活動(CSR)として取り組む場合は担当の人が事業としてやりますが、あすもりの場合は一生懸命な組合員さんがたくさんいて、その人たちが前面に出てきていろんなことを一緒に考えていったというのが特徴的です。自主的に、地域や環境のために何かをできないかと議論しあうということは、普通の企業のCSRではなかなか見られないことです。

また、全道百数十万人の組合員さんに森づくりの一環としての植樹に参加してもらうのは大きな意味があるけど、記念植樹だけに終わらないように考えよう、という話もありました。

●あすもりの森づくり、 どんな成果がありましたか？

そもそもたくさんの人に参加してもらって何万本を植樹するという数字を出すことにはひとつ意味があります。北海道ぎよれんと連携しながら、お年寄りから子どもまで植樹を通して森に

関わる入り口のところを体験する人がたくさんいたというのは大きい。

その中で、じゃあもう少し関心の高い人を集めて森を深く学んで、森づくりのデザインをしていったらいいのではないかと、「Fの森ワークショップ」の構想ができて、これはコープさっぽろのような大きな事業体のCSRとしてはなかなかそこまでいかない。大きな成果だと思います。

もうひとつは、助成を通じて北海道のたくさんの森づくり団体を支援するとともに、一緒になってイベントや活動やプロジェクトをやったり、連携ができたりしました。このネットワークを作れたことも大きな成果といっているでしょう。

12年のあすもりの活動は、点数でいえばけっこういい点だったと思います。評価軸はいろいろあって、コープのCSRという点や、組合員さんがどれだけ関与できたか、とか、でも、少なくともそれら全てで合格点以下、ということはないでしょう。方針がぶれることなく、設定したところに協力しあって進めてこれたのではないのでしょうか。

ただ、もう少しできたんじゃないかというところはもちろんあります。

●森そのものに対する影響は あったのでしょうか？

森といっても森林ボランティアや企

業のSCRでやるような森づくりでは、森の全体的な姿を大きく変えるような面積、というのはなかなか難しい。それよりも、社会的な影響を与えて、それが間接的に森づくりを進めている、という方が大きいと思います。森づくりの応援団ができたり、地域の中でコープのような事業体が関心をもったりしながら、大きな森づくりの動きがでてくる、という形の方が、市民の森づくりの意義として大きいでしょう。

CO₂の吸収源としての森づくりも、自分たちが実際に植えたということだけではなく、社会的な影響力を通じたより大きな森づくりによって達成してきたといえると思います。ただ、森には様々な機能や価値があるので、温暖化防止はそのひとつとして捉えたい。温暖化防止に関していえば、CO₂排出の削減が一番努力が必要だし、化石燃料から再生エネルギーへの転換も絡んでくる、様々な問題がつながっています。そういう中で森づくりがどの役割なのかを考えていく必要があります。

森の価値のひとつとして、経済的な部分もありますが、森づくりに多くの人が関わることで、林業や森への意識が高い人が増えていく、ということがあるかもしれません。現在主流の大規模加工流通の林業では、地域へのメリットはあまり大きくありません。森づくりに関わることによって農山村が自

あすもりが活動をはじめてから12年、モリイクも発行開始から10年が経ちました。ひとつ、これまでの森づくりを振り返って、あすもりの未来を考えるタイミングだと思ってあすもりの運営委員長、柿澤先生にお話を聞いてみました。

分の地域でまわしていくような、付加価値のある林産物を応援するなど、ニッチだけど地元を元気にするような循環的林業を支えていこうか、という力になっていくかもしれません。

●今後の活動の課題について おしえてください

やり残したこととしては、木を使って何かするとか、そういうところに踏み込めないかな、というところはあったけど、関われる人間も限られている中で、試行的にはやってみただけでなかなかそれ以上には進めなかったところがあります。

短絡的に木を使うのがいい、という話ではないけれども、植樹という方法で森づくりの入り口で関わってもらって、もう少し関心を深めてもらって、出口としての木の利用の方にも関心を持ってもらうきっかけづくりは、今後の課題として取り組めたらいいですね。

あとは、植樹から先の森づくりに関わってもらう仕組みとして「森づくりサポーター」などの組合員さんの登録をしたけれど、それをうまく使えなかった。せっかく登録してくれた組合員さんにもう少し働きかけたり、違った立場からの関わりを作れず、せっかくの思いを活かせなかったのは残念でした。森づくりだけに資源を集中できるわけではないですし、もうちょっと進

めたいというところではなかなかノウハウもなく、踏み込むのが難しいのが実情ではないかと思っています。

●これからのあすもりの ビジョンは？

植樹のスペースがなくなってきていることもあるので、これからはいろんな人が参加して循環型の森づくりみたいなところを考えるきっかけがくれるような、教育なんじゃないかと思います。木育とかにうまく学びながら、植樹や育樹だけじゃなくて森の循環、森の意味を理解してもらいながら、自分たちとの関わり合いを考えてもらうようなプログラムを作って、地域ごとにやっていくようなことができないかとは思っています。たとえば、組合員活動の中にも木育マイスター※がけっこういるんです。そういう人のつながりの中で、いっしょに組合員さんに向けて体験・教育をしながら日々のこと、森や地球のことを考えてもらうことはできないだろうかとかね。

今までは植樹や森とのふれあいなどの、森づくりの入り口のところで活動をしてもらっていたけど、これからはそれを基盤にしながら自分たちが森にどう関わっていくのか、自分の生活が森とどう関わっているのか、考えてもらうような機会を、北海道でいろんな形で提供できればいいのかな、と

植樹の次の
森づくりって？

もっと楽しい
森づくりが
あるの？



思います。もうひとつは、現実問題としてあすもりの事務局だけではマンパワーが限られるので、外部の人たちとどう連携してその場を作っていくか、ということがあります。事務局でプログラムを作っていけないと活動は立ち行かなくなる。地域で活動している人たちと関わって、一緒にやっていくことができたらいのかなあ。

あと、Fの森をコープの共有財産としてもっと活用できたらいいですね。植樹育樹だけでなく、体験プログラムの^{でみせ}出店を出してもらったりして、木を使ったものやジビエなど、そこにいて1日楽しめるような森のフェスティバルみたいなものもいいかもしれない。自分たちが作った森を楽しんで、この先につなげて行く、植樹祭をもう少し違った位置づけにしてコープみんなの財産にして引き継いでいこうな取り組みができたらいいなあ、とも考えます。

●次の10年について、 あすもりのスローガンを お願いします

これからは森に学び、森に生かされる、自分自身の生き方・生活と森の両方がよくなるように自分たちで体験したり考えたりする。そういうきっかけをあすもりの活動で提供していけたらいいのかな、と思います。✦

※木育マイスター
木育を普及させるための専門家。
北海道によって認定される。

森を統べる神々の名前

長靴の半分まで埋まる雪に足をとられながら、長い坂道を登って行く。アプローチの両側に育つトドマツは、緑の枝葉に重い雪を被って神々しい姿を現していた。他の木々は細く弱々しい枝を積雪にたわめられながらも、じっと厳しさに耐えている。他のどんな季節よりも森の沈黙は深い。張り詰めた冷たい空気を一振りで切り裂くナイフの様に、ギラリとした沈黙だ。親し気な春の、命に充ちた夏の、歌い上げるような秋の、かぐわしい緑の楽園はもう、どこにもない。あるのはただ、死にも似た眠りだけだ。凍えない様に、私達は命を松明のように掲げて森の懐に入っていく。にび色の空を見上げると、時折シルバーグレイのおぼろな太陽から、かざ花の雪片がふわりと光りながらこぼれ落ちるのが見えた。

カラマツの切り株を見つけてその上に積もった柔らかい雪を手でどける。雪はさらさらとした手触りで、小さく鈴の音を鳴らせた。いつになく軽い荷物から四合瓶の酒と甘いものを取り出し、供える。後は思い思いに手を合わせ、名前の無い神に静かに祈る。

これは毎年恒例になっている私たちの山仕舞いの儀式をスケッチしたものだ。山は雪深く、一年の半分は私たちの来訪をこぼみ、山づくりの作業はお休みになる。そうして私たちは思いを馳せる。いにしえの人々が森の生活を捨てて邑を拓き、そこで生きていかざるを得なかった所以を。

以後、人は森に背を向け、森を恐れ憎みさえたのだろうか。私はそうは思えない。至る所にその痕跡が残っているからだ。森の神の名前は古今東西至る所にある。例えば当地アイヌには、キムンカムイやコタンコロカムイなど、沢山の森の神々がいることは有名である。

ヨーロッパにも森の神がいた。グリーンマンをご存知だろうか。出自は既に絶え、謎とされているが、今日でも古い教会の柱に彫刻された彼らを見ることができる。大概は恐ろしい人面の口から植物が吐き出された姿だが、中には殆ど人型をとどめず、なかば木のようになっているものもある。ディズニー映画で人気のシャーウッドの森の義賊『ロビンフッド』は実話であるとも言われているが、このグリーンマンの係累であろうという説もある。

私のお気に入りの伝説に『ハンの木の王の娘』がある。父親の方はシューベルトの歌曲で有名なゲーテの詩の『魔王』だが、娘の方はもっとロマンチックだ。結婚式を前日に控えた若者の前に美しい娘が現れ、一緒に踊って欲しいと頼まれる。拒んだ若者は翌日、教会の中で、絨毯にくるまれ、息絶えていた。

森にはあまたの美しい神々が住み、魅力的な伝説が息づいている。このことは人が森と別れてから今も止むことなく、命のはじまりであり終わりでもあるその場所との繋がりを持ち続けていることの確かな証であると、感じるのである。🌲



text / 齊藤 香里
介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに「よいい木育倶楽部」を運営し、木育の活動を行っている。介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。

大きな木の小さな物語

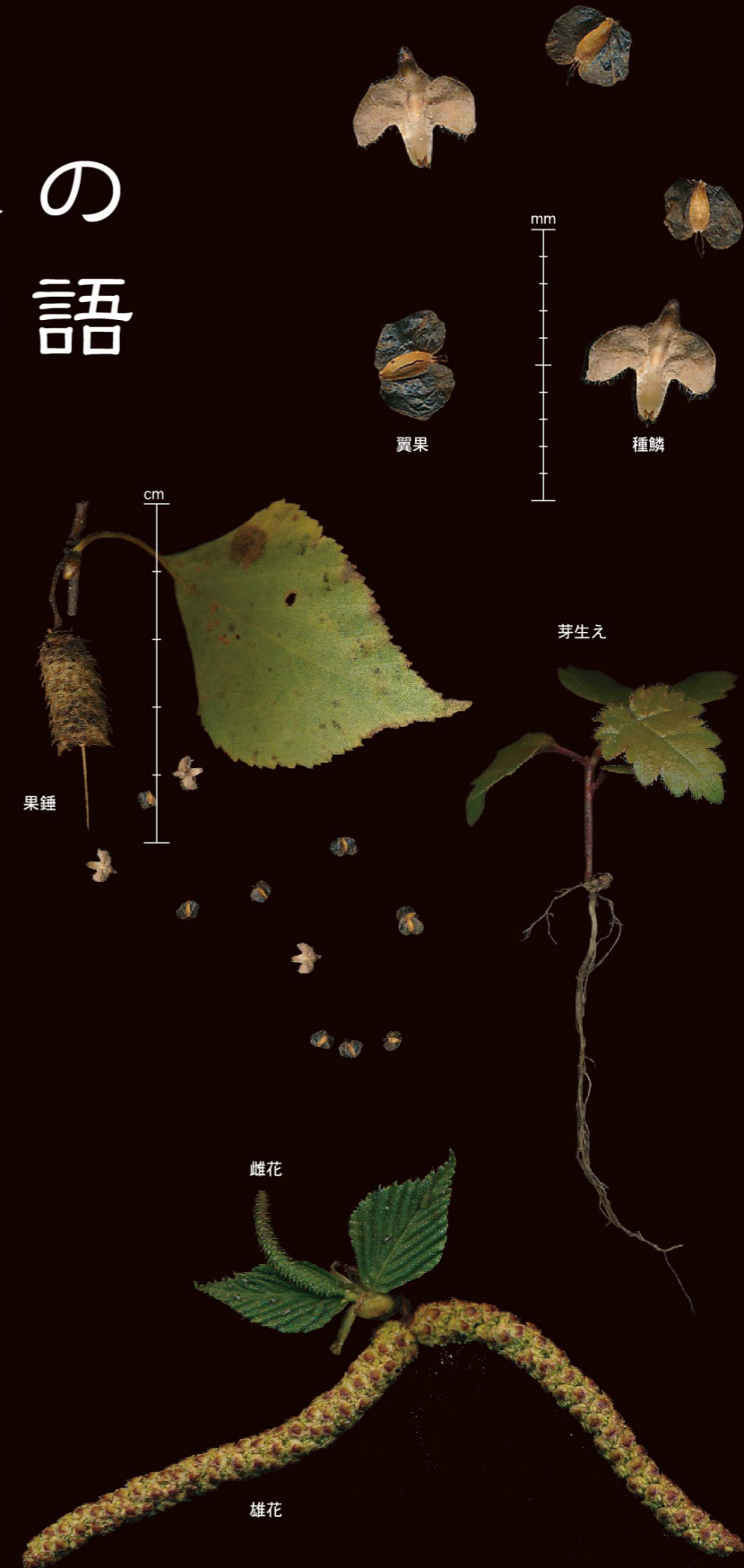
⑮ シラカンバ

シラカンバは高さ20~25m、太さは30~40cmほどになる落葉広葉樹。シラカバという名の方が一般的かもしれませんが、本州では高原にある樹林のイメージのようですが、北海道ではどこでもお目にかかる樹種といつてよいでしょう。

シラカンバの種子は、1粒の重さが0.4mg(1万分の4グラム)前後とたいへん軽い上に翼があるので、ヤナギ類ほどではありませんが、遠くまで飛びます。計算上ですが、風速4m/sで100mほど飛びそうです。また1本あたりに実る種子の数も膨大な量があるように見えます。このために山火事や大面積で伐採した跡地にはその周囲から一気に種子が舞い込み、純林を形づくれます。「高原をイメージするシラカンバ林」の成り立ちです。

シラカンバの名前の由来は「白いカハ」であるといわれています。全部が全部白いかというところでもなく、時折ちょっと赤みがかった樹皮のものを見ることがあります。沢状の地形などで湿り気の多いところで見られます。この正体は「気生藻類(きせいそうい)」といって陸上に生育する藻の仲間だそうです。アカカンバかしらなんて冗談を言っていたのですが、藻の仲間が付着していると知ったときはびっくりしました。シラカンバの天然分布は本州中部以北です。これらよりも南の地方でも植栽すれば育つそうです。が、樹皮が白くならず「茶カバ」になってしまうとか。以前、大阪の造園屋さんに聞いたことがあります。

シラカンバの樹皮は油脂分を含んでいるようで、きわめて燃えやすくまた火持ちがよいことは古くから知られています。長野県や東北の内陸地方ではお盆の送り火の燃材として使われたそうです。たき火の着火材としてとても使い勝手がよく、少量のシラカンバの樹皮があれば市販の着火材は不要です。私などは今でもガンピ(シラカンバの樹皮のこと)を重宝しています。🌲



text/images 孫田 敏
'54年山形県長井市生まれ。'77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。'90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士(建設部門：建設環境)。著書：アトリウムと植生(積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計：絵内正道編著)、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方(水辺域管理—その理論・技術と実践—：砂防学会編)、森林管理と市民参加(北のランドスケープ 保全と創造：浅川昭一郎編著) WEBサイト「Scan Botanica」http://scanbotanica00.sblo.jp



参考文献 佐藤孝夫,2011,増補新版 北海道 樹木図鑑,345pp,亜細亜社 上原敬二,1961,樹木大図説1,1309pp,有明書房 佐竹義輔ほか編著,1993,フィールド版日本の野生植物 木本,219pp,平凡社 森徳典,1991,北方落葉広葉樹のタネ—取り扱いと造林特性—,139pp,北方林業会 佐野雄三,2011,カハ/キ,伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂,カラー版 日本有用樹木誌,68-71,238pp,海育社 根拠 西部森林管理署,2012,釧路湿原自然再生の今,赤いシラカバ, http://kushiro-wr.blog.jp/archives/17154073.html (2020/05/28) 画像材料提供:雪印種苗株式会社(芽生え)

木のキモイキレイ
のぞいてみたら何かがいるよ。
ちょっとキモいわない？
よく見るとおもしろい！
さがしてみよう、木のいきもの。
ほら、いのちのふしぎにあふれてる。

道路や庭、畑、公園と、暮らしの近くでよく見るミミズ。
生きているのは土の中？
畑にミミズがいると良いって聞けれど
彼らは何をしているのかな。
身近だけどよく知らない、
でも植物にも動物にも大切な
ミミズについてお話ししよう。

植物、動物、ボクたちも
みんなにつながる

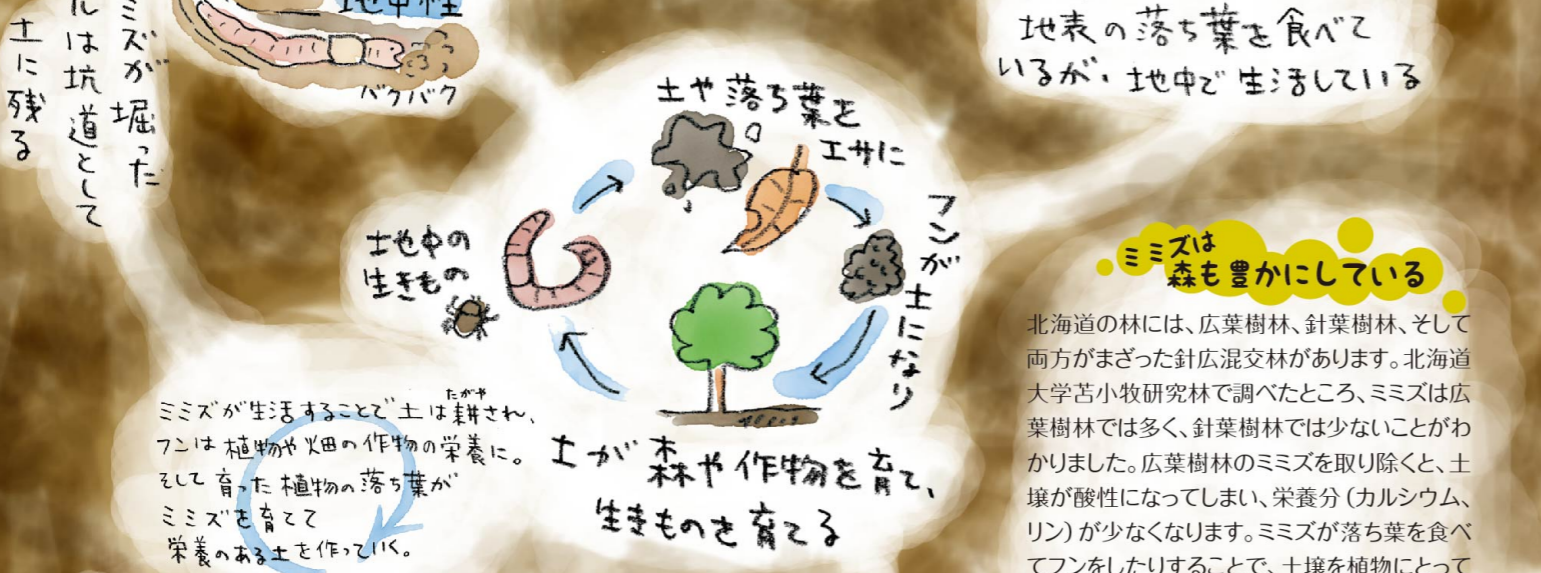


地球とイキモノをつなぐミミズ
ミミズは温帯から熱帯、地球上の広～い地域のしめった土の上や中の土壤で生きています。土壤とは地球の表面にあるやわらかい層のこと。みんなが歩いている足もとの土も土壤です。動植物や岩など、いろんなものからできていて、それらを結びつけているのがミミズなどの「土壤動物」と呼ばれるイキモノなのです。

ミミズ的生活

ミミズの種類別によって
くらし方が違うよ

ミミズにはいろんな種類があります。生活の仕方もさまざまです。地上で生活しているミミズは、**表層性**、**地中性**、**表層採食地中性**の3つの生活型に分かれます。公園や森林で落ち葉をめぐらして出てくるのが**表層性ミミズ**。卵で冬を越し、成長して夏から秋に産卵。冬には成体(大人のミミズ)は死んでしまいます。一方、**地中性ミミズ**は冬になると土の深いところへ移動して越冬し、数年間生きます。**表層採食地中性ミミズ**は、地中にトンネルを掘って生活しますが、地表に出て落ち葉などのエサを採ります。体が大きくなる種が多く数年間生きます。



ミミズのフンには、植物が利用できる栄養がたくさん含まれています。フンはミミズの粘液や微生物の活動によって、雨が降ってもこわれにくいかたまり(耐水性団粒)となります。フンの粒や坑道(ミミズが掘った地中のトンネル)はミミズの寿命よりもはるかに長く土壌に残り、いろいろな働きをします。私たちが見ている「土壌」は、ミミズのような生きものが食べた穴を開けたりして、何年もかけて作りあげた姿なのです。

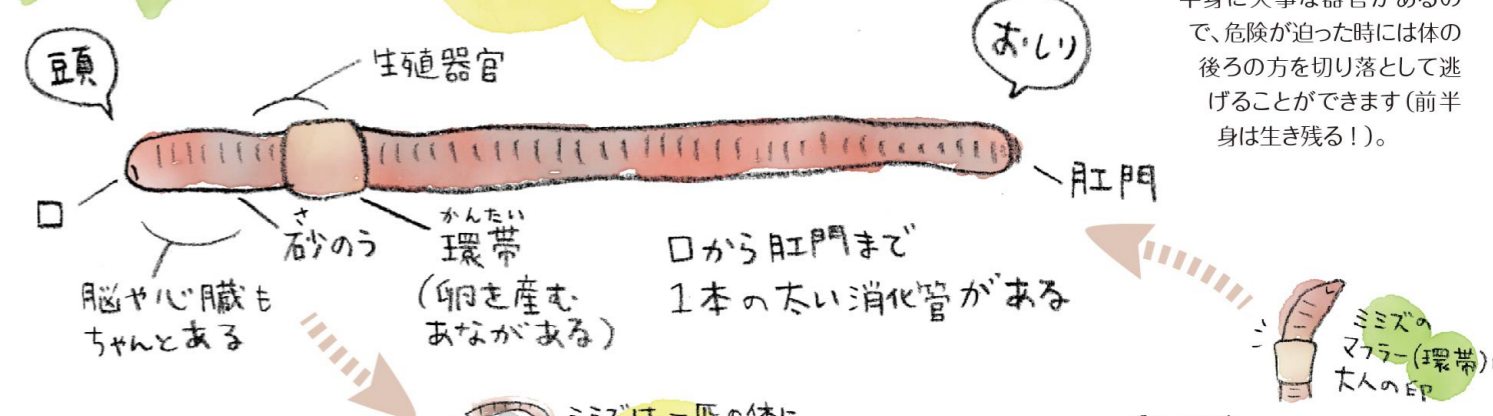
ミミズは森も豊かにしている

北海道の林には、広葉樹林、針葉樹林、そして両方がまざった針広混交林があります。北海道大学苫小牧研究林で調べたところ、ミミズは広葉樹林では多く、針葉樹林では少ないことがわかりました。広葉樹林のミミズを取り除くと、土壌が酸性になってしまい、栄養分(カルシウム、リン)が少なくなります。ミミズが落ち葉を食べたてフンをしたりすることで、土壌を植物にとって良い状態にしてくれているのです。

pH Ca P



ミミズ 蚯蚓のつ



本当のミミズに目はない。
でも光は体で感じている

ミミズは口から肛門まで1本の消化管が通っています(環形動物)。歯がないので、砂のうという部分で落ち葉を細かくして消化します。消化管を取り囲むようにあるのが生殖器官。前半身に大事な器官があるので、危険が迫った時には体の後ろの方を切り落として逃げることができます(前半身は生き残る!)。

ミミズは一匹の体にオスとメス両方の生殖のための器官があります(雌雄同体)。生殖は基本的に他のミミズと精子を交換して自分の卵を受精させます。そして粘膜の袋(卵胞)に包まれた卵を、環帯にある穴から土の中に産みおとします。



シマミミズの接合

卵から産まれる赤ちゃん。まだ環帯は目立たない

種類によって卵の形がちがう
卵は袋に包まれている(卵胞)

代表的な 北海道のミミズ

陸上に住むミミズは、私たちのとても身近なイキモノ。イトミミズのような水中性のミミズもありますが、ここでは、地上のミミズを紹介します。

- ヒトツモンミミズ(フトミミズ科)**
日本でもっとも普通に見かけるミミズ。地表性で腐った落ち葉と土を食べる。産卵して1年未満で死亡。卵で越冬。
- サクラムミズ(ツリミミズ科)**
地表採食地中性。北海道では山、森、草原、公園、農地などほとんどの環境で見られる。
- クソミミズ(フトミミズ科)**
地中性。地表面にフンのかたまりを出す。
- パライツリミミズ(ツリミミズ科)**
ほんのりバラ色のミミズで、森や草原に住んでいる。
- ノラクラミミズ(フトミミズ科)**
地表採食地中性。人家の植え込み、畑のまわりなど全国で見かけやすい。

ミミズは森のいのちを支えている
ミミズを食べるイキモノは、昆虫(シテムシやオサムシの仲間)、大型のカエル、地表で主にエサを採る鳥(ヤマシギ、クロツグミなど)、ミミズを専門に食べるモグラやトガリネズミなどの食虫類、イノシシやアナグマ、タヌキなどのほ乳類です。ミミズが落ち葉を食べる～ミミズが植物の栄養になる土をつくる～ミミズがいろいろなイキモノのエサとなる～ミミズが植物のエネルギーを多くの動物に受け渡しています。
※北海道にはモグラ、イノシシ、アナグマはいませんが、多くの生きものエサになっています。

新田薫/エトブン社
北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いているイラストレーター。トカゲと鳥とエゾシカが気になる。猫とキツネを見たら追いかけろ。クモはちょっとコワイ。好きなことは森と動物園と水族館の散歩。札幌出身。
エトブン社 <http://etobunsha.com>

宮本尚/きたネット
森好き、ヘンなイキモノ好きは、オオソク海を眺めて育った子どもの頃から。最近ではキノコのトリコ。シンガーソングライター。ライブ活動をやっています。
きたネット <http://kitanet.org>

みんなが名前を知っていて、実際の生活をよく知らないミミズ。ミミズは森林や草原にはたくさんいますが、農地にはほとんどいません。今、世界中の人たちが、ミミズが生活できる農地がいろんな意味で優れているのではないかと考えて保全的な農法に転換しつつあります。森だけでなくミミズが暮らせる農地も増えて、土がよくなることを期待しています。



金子信博さん
福島大学農食学類教授
長崎県生まれ。京都大学大学院農学研究科中退。農学博士。
島根大学生物資源科学部助教授、横浜国立大学大学院環境情報研究員教授を経て、2018年から現職。森林や農地における、土壌生物の多様性と生態系機能(土壌や植物との関係)の研究をしています。

ミミズはいろんな生きものエサになり、エサ木からもらった栄養をリリーのふろにつなげてゆく。

道民の森
神居尻
A地区
植樹から **11年**
2009,2010



A地区、Fの森ともにドローンで上空から撮影(2020年8月:川口弘高)

道民の森
神居尻
Fの森
植樹から **7年**
2013



A地区(2011年撮影)。雪折れした苗に添え木の手当

Report

植樹地を見に行こう

あすもりが森づくりをはじめて
10年以上がすぎました。
あの森は今、どうしているのかな。
植樹地の今を、木を植えたあの時から
レポートします。



Fの森の植樹(2013年撮影)

植樹をはじめたころの森 A地区

道民の森神居尻地区のA地区。あすもりが森づくりをはじめた最初の区画で、ここでシラカンバとミズナラが植えられたのは2009年と2010年のこと。今ではこんもりとした木立になっていますが、そこに至る道は平坦では

ありませんでした。

日本海側の山中にあたる道民の森神居尻は豪雪地帯。植えた苗木は毎年冬の間に数メートルの積雪に押さえつけられ、幹を伸ばすのも苦しそうにうねり、せっかく伸ばした枝は折れてしまうためになかなか上に成長できません。そこで、あすもりサポーターのみなさんと

雪折れしてしまった苗木に添え木をあてたり、Fの森ワークショップで折れた枝の整理をしたり、みんなで木々の健やかな成長を手助けしてきました。

そんな努力が実を結んだのか、植樹エリアのミズナラとシラカンバは現在、天空を目指して幹をぐんぐん伸ばしています。高く伸びた

ものは4~5mほどにもなり、2019年にはミズナラに結実(どんぐり)も確認されました。

植樹をはじめてから中間の森 Fの森

同じく道民の森神居尻地区のFの森は2013年から植樹が続いています。もっとも古い植樹地では、カツラやイタヤカエデ、ウダイカ

ンバなど、たくさんの樹種が植えられています。苗木たちは雪や動物の食害にも負けずに成長を続けていて、その様子はFの森のワークショップでモニタリングしていますが、高く伸びた木はやはり4メートルを超えるほどに育っていました。一方で枯れてしまった木、動物に強い食害を受けている木なども多く見られます。

この先にどんな手助けが必要になってくるかはわかりませんが、私たちとともに育っていく森であってほしいものです。

人が植えた木は人の手が入って森に育っていく、だからこれからも見守っていくことが必要です。そんなことを、A地区の森とFの森は私たちに教えてくれています。



雪の重さで苦しうに曲がるミズナラ。折れたり曲がったりした枝を剪定(A地区:2016年撮影)



枝を落としたことで幹の上に伸ばすことができ、ぐんぐん成長している(A地区:2019年撮影)



毎年ウサギによって強い食害を受けるウダイカンバ。植えた木々の成長を記録する(Fの森:2017年、2018年撮影)



シラカンバは4メートルを超えている。合間にカツラなども見える(Fの森:2020年7月撮影)

ほかの地区も 植樹地を見に行こう

コープさっぽろの各地区でも自治体などと森づくり協定を結び、独自の森づくりが進められています。今回は美幌(北見地区)と白糠(釧路地区)の植樹から約10年後の植樹地を拝見しました。



コープの森
全道16箇所のコープの森で、森づくりが行われています。

美幌の森づくり



植樹のとき (2009年)

現在の植樹地 (2020年)



松ぼっくりも。次世代の命を宿す準備も。



2~3年前の植樹地でも順調に生育中。

4mは超えていそう。元気に育っているカラマツたち。

すらりと伸びたカラマツたちはもう森らしい風格を備えています。美幌町は2008年の洞爺湖サミットを契機に環境に配慮した森づくりを目指すことになり、北海道を通じてコープさっぽろと森づくり協定を締結しました。美幌町の町有林は約45年を伐採期間としています。つまり、この森が伐採されるのは約35年後。その後また植樹して森を育て、持続的な林業を行っています。このことから、FSC森林認証を取得しています。このシステムが続く限り森づくりのスペースはあるので、これからもコープさっぽろとともに、森づくりを続けていく予定とのことです。

植林スペースは毎年できるので協定が続くかぎりはいっしょに森づくりをしていきたいです。



森林担当 稲葉 祥平さん 森林担当 藤田 知典さん 美幌町 耕地林務グループ

白糠の森づくり



植樹のとき (2008年)

現在の植樹地 (2020年)

多くの木は1~2mに育っている

中には3メートルを超える木も!



青々と、元気に葉を伸ばしています



40kmも山の中に車を進めてようやくたどりついた植樹地にはトドマツたちが元気に育っていました。植樹の時は、ササの根で覆われた地面に穴を掘って苗を植えるのは、本当に大変だったそう。たびたび林道が崩れるためにその後は訪れることもできず、今はもっと町に近い場所で植樹を続けています。釧路地区はあすもりサポーターさんや、森づくり団体に所属する方がグループで参加してくれたり、森づくりの意識が高く、植樹が終わったら育樹として白糠町との協定を続けていく予定なので、長く関わってほしいとのこと。この植樹地も、次に訪れるときが楽しみだそうです。

10年以上ぶりにこの植樹地を訪れることができましたが、これほど木が育っているのにおどろきました!



コープさっぽろ釧路地区 地区本部 湯谷 哲朗さん 地区委員長 立澤 留美さん

Report

コープ未来の森づくり基金 2019年度 活動報告・会計報告

2019年度の総植樹は9,665本、全道11カ所の「コープの森」では878名の組合員さんに参加いただき4690本を植樹しました。2008年からの累計植樹本数10万本を達成し、各地区で記念植樹が行われました。道民の森で行われた植樹祭では育樹祭の合同開催もあり、多くの参加者が森づくりを楽しみました。「あすもりサポーター」は1,549名(前年比107%)となりました。

道民の森の植樹地「Fの森」では「森づくりワークショップ」を開催し、組合員さんが参加する森づくりが進みました。7年目となるこの地区での森づくりで、参加者が未来に描く森も成長し、少しずつ形が見え始めています。

森づくり団体への助成金として、高額助成を1団体、小額助成を19団体に支援し、また北海道ぎよれの「魚付林植樹活動」への助成を行いました。

第10回の節目を迎えた北海道の森づくり交流会では、各地区の森づくりや助成団体の活動の報告をいただき、北海道で広がる森づくりについて参加者で学び、あすもりの今までを振り返る回となりました。

基金レポート「モリイク」は18・19号を発行し、森づくりの交流サイト「モリイクFacebook」も「いいね!」が1,300件を超え、順調に推移しており、森づくりの輪を広げています。

2019年度収支一覧

(単位:千円)

	19年度予算	19年度決算	内容
レジ袋積立	23,520	22,612	レジ袋辞退の積立金
協賛金ほか	5,200	4,692	エコ協賛金、企画協賛金、書き損じハガキ収益
収入計	28,720	27,304	
植樹森づくり活動	15,600	12,618	植樹・育樹活動、つながる森づくり企画
助成金支援	5,900	9,288	森づくり団体への助成
広報・調査・運営費	7,220	7,509	広報誌、調査研究、運営費
支出計	28,720	29,415	

Present アンケート&プレゼント

- Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
- Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか? 右から3つずつお選び下さい。
- Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか? (はい・いいえ)
- Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
- Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

写真随筆「淡いの森の奥へ」(P2~7) あしたのあすもり (P8,9) 木育エッセイ (P10) 大きな木の小さな物語 (P11) 森のキモイ! キレイ? (P12,13) 数字で見るあすもりの12年 (P14,15) 植樹地を見に行こう (P16~18)

「モリイクvol.20」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

SPECIAL PRESENT!



アンケートに回答いただいた方から抽選で2名様に札幌の木工房「チエモク」から、チップになるはずだったクルミの木を有効活用して生まれた不揃いのカッティングボードをプレゼントします。

応募方法

アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。プレゼントの当選は発送をもって替えさせていただきます。応募締切 11/30(月) 当日消印有効

コープさっぽろ基金事務局

〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号
FAX: 011-671-5743
メール: csapmori@todock.coop



携帯メールはごちからどうぞ